

県民文化祭「坂州農村舞台公演」

那賀町教育委員会木沢分室堤貴昭

今年の、坂州農村舞台公演は県文化国際課のご厚意もあり、徳島出身の俳優高津住男さんと妻の真屋順子さん主宰の劇団樹間舎や徳島市の駒三座をお迎えしました。天候にも恵まれ、高津さんと真屋さんの人気もあってか、六百名もの方が来場され例年のない賑やかなイベントになりました。

公演は、地元木沢芸能振興会の「恵比須舞」で開幕、まずは駒三座の「朗読と尺八による傾城阿波の鳴門」が演じられました。これは現代語訳の「順礼歌の段」を住友美代子さんの朗読と、清水露保さんの尺八に合わせて演じるもので、分かりやすく人形浄瑠璃が身近に感じられました。その後を受けての、木沢芸能振興会の「十郎兵衛内の段」は大勢の観客を前にいつにもない緊張の中での上演となりましたが、無事練習の成果を発揮することができました。

昼の休憩時間、人形浄瑠璃が盛んだった時代に、祭りや芝居鑑賞など人が集まるときに料理などを入れてふるまった「荷びつ」という天秤状の弁当箱にサンマの寿司を入れて販売したり、餅つき実演を行いました。地元のユズを使った寿司やつきたての餅は好評ですぐ売り切れしました。

いよいよ午後からは、高津さんと、真屋さんの登場です。最初に木沢小学校の児童が、芝居衣装を身にまとい高津さんと競演し会場を沸かせました。



平成17年10月30日(日)劇団樹間舎公演「阿波人形師忠三郎の千夜一夜」

芝居は、勝浦座の操る人形も交え、時にユーモラスに時に幻想的な雰囲気会場を包んでいきました。また、もう一度芝居をという思いで病から復帰した真屋さんが、車いすから立ち上がり舞台で舞う姿に皆心を打たれました。

今回の公演は現代語訳の人形浄瑠璃、人形浄瑠璃と芝居の競演など、今後の企画等をする上で大変勉強になりました。多数の来場にも、地元消防団や那賀警察署のご協力で、スムーズに進行することができました。また文化協会や婦人会など地域の各種団体の方々、県文化国際課の皆様その他たくさんの方にご協力をいただきあらためてお礼申し上げます。

ホームグラウンドと遊山箱 とくしま文化フォーラムを終えて

徳島大学(四月からは武庫川女子大学へ転勤) 三宅正弘

どんな格好をしようか。若狭豫師匠の新内節が楽しみでしようがなかった。舞台を見に行くというのは、その日が近づくにしたが、気持ちが高ぶってくるものだ。そしてその舞台にあった格好とはどういうものか気になってしまった。客の側でありながら格好を考えるのもおかしいのだが。そして同時に主役にも興味がいき、普段どんなお稽古をしているのだろうと気になってしまふ。舞台にはホームグラウンドがあり、その舞台がそんな街で育まれていったのかを知るのも楽しみの一つだ。新内の舞台も見てみたいと、霞ヶ関の国土交通省の委員会があるたびに、師匠のお稽古場近くを散歩した。神楽坂、今は若者の街と人を集めているが、邦楽の楽器屋さんがあったりと大人の街だ。歩いているうちにまた当日が楽しみになっていく。そして思いついた。お客としてホームグラウンドを飾ろうと。遊山箱をもっていこう。徳島の野遊びには欠かせなかった遊山箱、これは、これからの農村舞台や徳島の舞台にも似合うはずである。当日の格好がきまった。前日に遊山箱を買いにい。佐藤さんに相談すると遊山箱を置いている店を教えてくださいと持っていた。農村舞台にも似合うはずだと。そして当日、お互い下げていったが意外と盛況だった。やはり、徳島の舞台には遊山箱が似合う。舞台見物は遊山である。欧米の観劇とはいささか違う

きもするのだ。そして、師匠の舞台が始まった。日高川入相花王は関西弁なので体にすっとはいって来た。印象深い舞台だった。本当に良い一日だった。そして、さらに、師匠に引かれた。今度、師匠のホームグラウンドで舞台が見たい。そう思い、江戸の舞台に向かった。江戸では、能とのコラボレーションだった。舞台は、江戸の師匠のファンで満員で、そのときの舞台と客席が一体となった空気は忘れられない。最高の舞台だった。今、師匠と農村舞台のコラボレーションが始まっている。またいつか徳島でも、あの空気を味わいたい。師匠の準ホームグラウンドにしてもらえるような街になりたいと思う。徳島は、劇場国だ。一村一舞台ある。そこに、世界からコラボレーションする演者が訪れ、そして街が舞台を育む。師匠の試みは、劇場国・徳島のプロローグだ。



遊山箱

犬飼農村舞台

犬飼農村舞台保存会 大杉洋子

「おめでとうございませうってこのお花持つて行つてよ」昭和三十年前半だった。母に言われて浄瑠璃芝居の行われている田舎町の専売公社の倉庫の薄暗い中を少し明るい場所を目当てに入っていた。県南部には戦前、嫁入り前の娘は大阪へ行儀見習いとお裁縫を学ぶため奉公に行く習慣があった。何年かして帰り親の決めた人と結婚するのが普通だった。

私の伯母にこれを侵して大阪で嫁に行つた人がある。旦那様は野澤吉丈という文楽の大夫であった。疎開で私の里に来ていたそうで、子どもの頃二階の押入に浄瑠璃の本がたくさんあったのを覚えている。

犬飼農村舞台がある五王神社は、五柱の女神が祀られていて荒々しい神輿や馬などは好まれず、襖カラクリとか浄瑠璃芝居、素人芝居を奉納している。

襖カラクリは人形芝居や歌舞伎芝居の背景として発生した。犬飼の襖カラクリは県下でも大掛かりで百三十余枚の襖を操作して四十二景の景色、動物、花、模様などに変化させる。襖は明治時代に京都や地元の絵師によって描かれたもので、泥絵具を使って地元の紺屋が制作したという。

平成八年NHKの「中継日本の夜」を見た石川県の方から、襖絵にある波と兎の絵について、日本海の波頭が風に砕けて白く見えることを「波兎が跳ぶ」とい絵馬額にもある。同じ意味があるので



平成17年11月3日(木)犬飼農村舞台公演

はというお手紙をいただいた。

イギリスの芸術家が襖の操作をヒントにして立体感のある絵を発表された。昨年は日本の中世からの世情とか芸能を研究なさっているポーランドの女性が熱心に質問された。大正に質問された。大正に質問された。大正に質問された。

大阪産業大学四回生の富本亮太さんは卒論に農村舞台を取り上げてくださって、二日間見学していかれました。

粧ふ山騒々順礼歌の段
ぬくめ酒酌みて浄瑠璃正念場
人形のつり目の不思議秋澄める
冬近し人形遣ひの慣れぬ針
秋日濃し柴屋に並ぶ舞台下駄

鎌瀬農村舞台での公演

相生森林美術館学芸員 東浦博史

鎌瀬農村舞台は相生森林美術館から徒歩三分、川口ダム湖を一望できる山神社の境内にあり、平成三年に再建された新しい舞台である。以前の建築は明治三十九年で、梁には天保四年の落書きがあったことが「阿波のまちなみ研究会」の調査で確認されている。上演については昭和三十年頃まで行われたとのことであり、現在では昭和十一年に製作された引き幕がその名残をとどめている。

そもそも、江戸末期から明治、大正にかけて旧相生町内には竹ヶ谷座と雄座の二つの人形座があった。その竹ヶ谷人形座の頭や衣装の一部が美術館に隣接する相生ふるさと交流館に展示してあることから、地域文化の継承と向上を推進する美術館・交流館の活動の一つとして人形浄瑠璃の公演を行うこととなったのである。

平成九年の第一回の上演は舞台のこけら落としをかねての公演であった。なにぶん初めての事でもあり、会場設営や準備作業を地元の方々をはじめ多くの方に教え願ひながら、かなりの労力を要したことを覚えている。平成十年度以降は毎年秋に行い、これまでに「傾城阿波鳴門順礼歌の段」「十郎兵衛内の段」「壺坂靈験記 山の段」などの演目を木沢村芸能振興会により上演した。また平成十年、十一年には相生中学校の生徒が三番児童など出演、平成十五年は相生小学校児童による太鼓演奏なども行った。



平成13年11月4日(第5回公演)
今年度は、平成17年11月6日(日)に第9回公演を開催